慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	牟田口義郎『中東への視角』
Sub Title	Yoshiro Mutaguchi, The viewpoint toward the Middle East
Author	富田, 広士(Tomita, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1978
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.51, No.10 (1978. 10) ,p.99- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19781015-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

牟田口義郎

『中東への視角』

一

本書は、アラブ問題の分析で著名なジャーナリスト、牟田口氏が一九七六年から一九七七年にかけて発表した論稿を中心として、編集された論文集である。本書は次の四部から成つている。

Ⅰ　志賀重昂の最後の旅
Ⅱ　私の旅の記録
Ⅲ　中東への手がかり
Ⅳ　ＰＬＯとシオニスト

第一部は、大正時代の日本人地理学者、志賀が行なつた中東紀行を跡づけることによつて、志賀の中東情勢に対する認識の確かさに今日的視点から光を当てている。第二部は、著者がアラブ首長国連邦及び日本政府の対中東文化交流調査団の一員として、イラン、イラク、シリア、エジプト、アルジェリアを訪問した際の、旅行記である。第三部は、現代アラブ諸国の経済発展の現状を分析し、開発に関して「アラブの論理」とは何かを解明している。第四部は、いわば資料編である。すなわち一九七六年から一九七七年にかけて、ＰＬＯとイスラエル、ハト派の間に行なわれた和平交渉の過程を扱つている。つまり一九七三年の第四次中東戦争以来停滞していたパレスチナ和平の新しい動向である。以上のように、本書は特定の研究テーマを体系的に考察したものではない。しかし著者は本書を通して、アラブ問題になじみの薄い読者に、中東とはどういうところか、日本人はこの地域と、どのような問題関心の下につき合うべきかをわかりやすく解説している。その意味で、本書はアラブ問題についての優れた啓蒙書といえる。

そこで、本稿では著者の中心的意図である「中東への視角」に最も適した、第一部と第二部を紹介し、著者がどのような問題提起を行なつているのかを明らかにしてみよう。

二

第一部は、著者が一九七三年から一九七七年にかけて、中東調査会編『中東通報』誌上に断続的に連載したものの再録である。この第一部は本書の中の圧巻である。ここには、著者の中東研究に注いだ情熱が見事に結実している。著者は志賀重昂を借りて、一九七〇年代の日本人に対し、アラブ問題についての無知がもたらす悪影響を警告している。

志賀重昂は明治以来、世界を三度一周した地理学者である。志賀

はその第二、第三回の旅行を、『知られざる国々』という本にまとめ、その中でキューバ、ブラジル、パラグアイ、チリ、メキシコ、ビルマ、中東諸国、南アフリカ各国を取り上げた。著者がここで参考にしているのは、この『知られざる国々』中の中東諸国を取り上げた部分である。この部分は「志賀が現地における石油事情の視察を中東旅行の柱のひとつにしている」ために、今日的意義を持っているのである。

著者が志賀の中東理解の優秀性を強調する理由の一つは、志賀が大正時代においてすでに石油の重要性に注目し、その視角から中東を見ていた点である。志賀は次のようにいう。「この地球は、空、陸、水の三つよりして成つている。しかして空を支配するは飛行機であり、陸を支配するのは自動車であり、水を支配するのは船である。しかるに飛行機も、自動車も、船も、ガソリン油すなわち石油に依らざれば一寸だに行る能わず。すなわち石油なき国家は空、陸、水に劣敗し、この地球の上に存在を容さざるに至るべきである。（中略）しかれば将来のことは一言にて尽くる。いわく、石油の供給の豊富なる国家は光り栄え、石油のなき国家は自然に消滅すと。（中略）しかるに日本にては現在の少々数なる飛行機、自動車、内燃機関に消費するガソリン油すらも、その三分の一だに国内において産出し得ない。日本の石油政策は如何、これぞ実に日本国家の生存問題である。」（十一～十二頁）このような石油の重要性の認識の上に立つて、志賀は日本の石油政策確立の緊要性を次のように提言した。「一、油が断ゆれば国が断ゆることを、日本国民の間に徹底せしむることが、まず以て日本の石油政策を確立せしむべき第一の手段である。二、日本国内および日本に接する方面における含油地層およびオイル・シェールに徹底的調査を遂行せよ。三、ロシア、ボルネオ等より永久に石油の供給を仰ぐべき契約を締結せよ。四、『石油以後の燃料問題』の研究を奨励すべし。」（十二頁）

著者は以上のような志賀の提言を引用しながら、「現在のエネルギー危機に思いをめぐらせば、半世紀前の志賀の提言は、驚くべき先見の明にみちているといわざるをえない」とする。更に著者は、志賀が一九二四年当時のイラクとイランの石油事情をどのように把握したかを明らかにする。志賀は初めに、当時世界一といわれたアバダンの製油工場を見学した。続いて、列強によるイラク油田の争奪の経緯を解説する。志賀は現地視察の結果、中東石油の埋蔵量の大きさに印象づけられた。そして日本の石油供給の現状を顧みて、次のようにいう。「日露協定により北樺太の石油採掘権がわが手に入つたりとて、鬼の首でもえたようにいいはやすも、含油総高は八百万トン、ペルシヤの一地方の採掘高の二年三ヶ月に過ぎぬとは、あわれ千万である。これを見ても、日本の石油政策は必死となりて顧慮せざるべからず。」（四三頁）

志賀のこうした石油に対する認識は、著者が指摘する通り、今日においても新しさを失なつていない。しかし著者は、志賀が中東石油そのものの豊富性を十分に認識したか否かを必ずしも明らかにしていない。確かに、志賀は日本の国家建設に石油が不可欠な点を鋭く見抜いた。また中東視察を通して、ヨーロッパ列強が石油利権獲

得競争を行なつている事実に直面した。けれどもそのことから直ちに、志賀が中東地域の石油埋蔵量の大きさをも認識したとはいえないはずである。ちなみにアメリカが中東石油の豊富性を発見したのは、第二次大戦中のことであり、同地域における石油開発を積極化させたのはそれ以後のことである。(Benjamin Shwadran, The Middle East, Oil and The Great Powers, 2nd ed. New York, 1959, ch. XII)

同時に著者は、志賀の中東情勢に対する認識のもう一つの特徴として、彼が中東を「世界的関ケ原」としてとらえたことを挙げる。志賀は次のようにいう。「敢て問う、世界的関ケ原とは何ぞ、いわく東西の衝突である。西すなわち白人閥と東すなわちいわゆる有色人種との興廃である。」(三四頁)そして欧州外交の温床が、バルカン半島から中東へ移動する過程を、次のように説明する。「大戦役(第一次大戦を指す……筆者注)の結果、四大帝国があたかも申し合わせたるがごとく、そろいもそろつて滅びたる以上、いかにバルカンの内にあつてうごめいたとて問題が拡大すべき公算がなくなり、バルカンの葛藤は烏天狗の蹴合いに過ぎなくなつた。したがつて……列強紛糾の温床はアラビア系に移動し、アラビア系列小国が最も新しきバルカンとなつた。……しかるに日本は同じアジア州の内にありながらアラビアのことなどはまつたく風馬牛視し、どこに風が吹いて居るやと思い居り、相も変わらずバルカンの変動を大事がるなどとは、大小本末の別を弁えざるも甚しといわねばならぬ。」(六四頁)志賀はこうした問題関心に基づいて、旅行中、中東およびアフリカ地方における民族主義運動の現状に対して強い興味を示したのである。

以上のように著者は、志賀の中東旅行をもう一度自分で跡づけることで、志賀が発見した二つの問題——石油と「世界的関ケ原」——の重要性を読者に訴えている。著者によれば、「戦後の日本において、中東問題を語つて志賀に言及した文章はない。」この意味で、志賀が天才的な直感を以てアラブ問題の核心をえぐり出した功績を掘り起こした著者の努力は、貴重なものと思われる。

次に第二部の紹介に移ろう。

第二部は三つの章からなるが、第一章は、著者がアラブ首長国連邦を訪れた際に、見学した遺跡にヒントを得て書かれた、考古学風の好エッセーである。著者はこれを書くに到つた動機を次のように語つている。「アラブ首長国連邦……は、世界一の一人当たり国民所得を持つという純粋な成金国家ですけれども、考えてみますと、単に黒い黄金だけによる国家ではなくて……縦の深い歴史を持つている。」(一二八頁)つまり著者は、アラブ問題を理解するためには、単に現象面の把握だけでは不十分であり、歴史や文化に対する深い理解が先行すべきだという立場に立つ。ここには著者の中東研究に対する基本的姿勢がよく表われている。

さて、こうした前提に立つて、著者は次の二つの問題についての考察を進める。第一は貿易ルートという点から見たウム・アル・ナール文化であり、第二は中世から近世にかけての、イブン・マージドを中心とするアラブの大航海時代の盛衰である。

第一のウム・アル・ナール文化は、アブダビ周辺唯一の先史文明の遺跡である。ここで発掘された円形古墳から、この地は先史時代において、シュメール、インダスという二つの文明を結ぶ海上貿易の中継地点であつたことが分かつたのである。と同時に、この地に住んだ民族は、古代オマーン人の文化を継承しており、このオマーンで産出された銅をシュメールに運ぶ上で、カッパー・ルートの中継基地としての役割を担つていたと考えられる。更に彼らは一方でこのように貿易に従事しながら、他方で漁業や牧畜を行なつて、多角的な生活様式を持つていた。

このように、著者は四〇〇〇年以上前のアブダビの文化状況を再現する。それは考古学の専門家から見れば、アマチュアの作業の域を出ないかもしれない。それにもかかわらず本章は、著者の中東に対する縦横無尽な関心をよく示している。牟田口氏の問題関心の中には、アラビア文化に対する飽くことのない探求心が大きな部分を占めているように思われる。

本章の残りの部分では、アラブの大航海時代が扱われている。まず著者は、従来ヨーロッパ人による「地理上の発見」の一つと見なされている、ヴァスコ・ダ・ガマのインド洋航路発見に対して、疑問を投げかける。中世を通じて、インド洋から東シナ海にかけてはアラブの海と呼ばれていた。著者はヴァスコ・ダ・ガマがアフリカ東海岸でインド行きのために、優れたアラビア人の水先案内人を雇つた事実を指摘する。彼はラスール・ハイマ（現在、アラブ首長国連邦加盟国）出身のイブン・マージドであつた。イブン・マージドは高度の航海術を使つて、ヴァスコ・ダ・ガマの一行をカルカッタへ導いた。著者はこうした事実をつきとめることによつて、ヴァスコ・ダ・ガマがアフリカ沿岸からインドまでノンストップで航海することができたのは、イブン・マージドの功績であると主張するのである。

しかし著者が、こうした素材を用いて読者に訴えかけようとしているのは、ヨーロッパ中心的歴史観の修正の必要性である。著者は次のようにいう。「コロンブスとヴァスコ・ダ・ガマ、それからマゼランの世界一周などによつて人類の大航海時代が始まるなんて言われますけれども、これは人類じやなくて、単なるヨーロッパ人の航海時代である。彼ら以前を見ますと、このインド洋にはイスラム商人による大航海時代があつた。」（一一二頁）このため、アラブの大航海時代に関する記述は、おおむねヨーロッパ中心史観を修正しようとする視点に立つた研究に基づいている。すなわちダルドー、ラクチュール共著『シンキロウ首長団』(Gabriel Dardaud, Jean Lacouture《Emirats Mirages》Seuil: Paris, 1975) である。

第二部の第二、第三章は、著者が一九七六年に日本政府の対中東文化交流調査団の一員として、アラブ諸国を視察した際の、視察報告である。まず著者は、日本の対中東認識の現状を次のように捉える。「わが国は相手を知ろうとしなかつたし、また国情を相手に知らせることも怠つて来た。日本人の心理的地図からいえば、中東はアフリカとともに、世界でいちばん遠い地域だつた。」（一三〇頁）こうした現状把握は、文化交流史的考察によつて裏付けられる。著

者は小林元『中東と回教圏との文化交流史』を引用しながら、日本人の対中東認識は歴史的に浅く、明治以後、第二次大戦後においてさえ無関心状態が続いた事実を明らかにする。

ではこのような現状をいかに改善したらよいか。著者は次のようにいう。「行動の実をあげるには、相手の国情を知り、その要望にこたえることが大前提となる。各国の高官たちと会つた結果再確認したことは、国づくりに対する熱意であり、そのため彼らの文化意識の中では教育問題が大きな地位を占めていた。（中略）高等教育、とくに技術の習得が若者にもつとも求められている。」（一三一頁）つまり日本は各国の国家建設に必要な技術教育に対して、寄与することができるのである。更に著者は、その具体例として、留学生のための帰国後の〈アフタサービス〉の必要を挙げている。

最後に著者は、国家的政策として文化交流を推進する上で、「文化外交」を確立する必要性を指摘する。著者によれば、文化外交とは、政府首脳の大きな政治的決断と切り離せないものである。それがあつてこそ、具体的な交流に必要な充分な予算を獲得することができる。これは、著者の文化交流促進についての論点の中でも、最も重要な点である。

三

以上から、著者がどのような「中東への視角」を持つているかが、明らかになつたと思われる。一つは、アラブ問題の現状分析を重視していることである。これは第一部によく表われている。もう一つは、アラビアの歴史や文化に対する強い関心である。これは第二部第一章によく表われている。そしてこれら二つの視角は、著者の研究の中に常に並存している。こうした問題関心に基づいて書かれた本書は、日本人が対中東認識を深める上で、好個の入門書となることは間違いない。（朝日新聞社、昭和五二年、二九八頁）

富田広士